
おいでませ!!忍術学園!!

黒夜レイラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おいでませ！！忍術学園！！

【Nコード】

N4501S

【作者名】

黑夜レイラ

【あらすじ】

オリジナルのキャラ達と忍たま達とが送る学園生活！！

友情したり恋(?)したり！

はじめに

ある日、突然空から降ってきた正体不明のとある少女達……。
彼女達が巻き起こすいろいろな非日常を、忍術学園のみんなと共に
過ごしていくほのぼの(?)学園コメディ**

普通に人外が出たり、もう人間の闘いじゃなかったりなど、ムチャ
クチャはっちゃけてます。

それどころか、何だか忍たま達の活躍が微妙だったり……f ^ | ^ ;

私、黑夜レイラが性懲りもなく考えたオリジナルのキャラ達と忍た
ま達との絡み……(?)

それが許せる方のみ、ドウゾ!!

オリキャラ紹介その1

琥珀 こはく 種族：死神

・人の世とは異なる世界『アカツキ』の住人。死神といってもまだ未熟。銀髪赤目の背の低い少女で、だいたい見た目的に3年生位。自分より遥に大きい鎌を武器に戦う。物静かで、感情を余りださない。羊羹 ようかん が好き。千代の事を『マスター』と呼んでいる（その訳は謎）

基本的にいつも黒の着物を着ている。

別名『赤月 せきづき の死神』

そのはら 園原 ちよ 千代
種族：人間

・アカツキにある“園原神社”の巫女。優しい性格だがどこか抜けている時もある。巫女だけあって霊力もそれなりにあり、切り札（？）の霊符 夢封 むふう の効果は絶大。外見からして16〜17才位。長い髪を腰辺りで縛っている。基本的にいつも巫女服。
別名『赤月の巫女』

風間 かざま 時雨 しぐれ
種族：死神

；アカツキに住む住人。いつも元氣MAXで明るすぎる性格。刀の申し子と呼ばれ、その名に恥じぬ刀の使い手である（要はうまいってこと）。何かとハプニングを持つてくるので、ある意味迷惑きわまりない。亭々宮 ていていきゅうに勤めている藤崎 咲夜の幼なじみ。黒髪ポニーテールで袴を着用。二刀流剣士。

霊力：アカツキに住む住人全員が持っている力。忍たま達で言う“体力？”の事。

霊符：霊力で出来た札の事。初級の霊符ならある程度練習すれば簡単に使えるようになる。

中級、上級になると、霊符の効果や威力は増すが、その分消費する

霊力も上がる。（千代の持つ霊符＞夢封＜は上級霊符に入る）

藤崎 ふじさき 咲夜 さくや

種族：死神

・アカツキにある亭々宮にメイドとして勤めている少女。優しいが怒ると怖い。亭々宮の主『清神寺 せいしんじ 東魔 とうま』の事を敬愛している。時雨に大抵振り回されている苦労人。でも、幼なじみだからほっとけない。水色の髪を首より少し下辺りで縛っている。時雨曰わく、「咲夜はあたしの嫁！ー」らしい。

事件の匂い の段！

今は戦国室町時代……。各所で毎日領地を奪い合う戦が絶えない。そんな所に、まだ半人前の少年少女を、一人前の忍者・くのいちに育成する学校がある。それがここ、

「忍術学園で〜す!!」

「…乱太郎？誰に話してんだ??」

「どうしたの??いきなり」

「??私にもわかんないけど、何だか聞かれた気がしたから…」

「何だよそれ〜」

…………、ご丁寧にどうも。

そう、一人前の忍術に育て上げる学校、それがここ『忍術学園』である。この学園に居る間、生徒達は忍者のたまご…『忍たま』と呼ばれている。一人前の忍者になるべく日々、努力をしている。

そしてここにも、一人前の忍者になることを夢んでいる少年達がいる。

「それにしても平和だね〜」

水色の忍装束を着ている眼鏡をかけた少年がいった。

「オレも、最近いいアルバイト無いから暇だ〜」

こちらと同じ水色の忍装束を着て、首に黒の手拭いを巻いている少年が言った。

「ぼくはお腹空いた〜」

上の二人と同じく、水色の忍装束を着ている、ふくよかな体系をした少年が言った。

この子達は忍術学園の1年は組の生徒。

上から順に『乱太郎』『きり丸』『しんべん』。1年ということもあり、上級生みたいに危険な実習も無いので、3人は暇なのか空を見上げていた。

「な〜んか面白い事でも起きねえかな〜」

「またまた、そんな事言つて。そう言つてると本当に起こるよ?？」

「オレはそれを望んでんだよ〜」

「全く、きり丸ったら…」

「……………ん?」

のんびり話していると、空に何やら穴みたいのが現れた!!

「うわあっ!?! な、何だあれ!?!?」

「そら…、空にあ、穴あ…!?!?」

「食べ物でも出てくるのかなあ!?!」

「しんべん!?! なに呑気な事言つてるんだ!?!」

「おい!?! あの穴、裏裏山に近くないか!?!?」

「あっ!?! 本当だ!」

その穴は良く授業でも行く裏裏山に限りなく近い位置にあった。

「よし！行ってみるか！」

「ええ！？き、きり丸！！？」

先陣切って行くと言い出したきり丸を、すかさず乱太郎が止める。

「何だよ乱太郎」

「何だよじゃないよ！！何が起こるか分からないんだよ！？私達だけで行くのは危険すぎるって！！」

乱太郎が力強く説得する…がきり丸は、

「大丈夫だつて。ヤバいと感じたらすぐ引き返せばいいだけなんだからよ」

「何かあつてからじゃ遅いんだけど……」

乱太郎の説得は効かず、きり丸は裏裏山に向かって走り出した。

「うえっ！？ちよつ、きり丸！！待ってったら！！」

「ああ！乱太郎、きり丸。置いてかないでよ！！」

乱太郎としんべもきり丸を追って裏裏山へ…。はたして、あの穴は一体何なのか。

そして、3人を待つモノとは……！！

「此処は……、他界？」
そう遠くない未来、3人は2人の少女と出会う。

不思議な少女の段！

前回、突如空に謎の穴が出現した。その穴は、学園からそう遠くない裏裏山に近い所にあると予測。興味本位でその穴に近づいてみることにした、乱太郎・きり丸・しんべエの3人。はたして、裏裏山にはなにが……。

「ねえ、きり丸。今からでも引き返さない？」

「そうだよ。今ならまだ間に合うよ」

裏裏山を登り始めて約10分…。先を行くきり丸に乱太郎としんべエが言った。

その言葉にきり丸が振り返り、

「何言っただんだ二人とも。まだあの穴の事、何にも分かってねえじやねえか」

と言い、また歩き出してしまった。乱太郎は、これから起こる分からない“ナニか”に不安を感じた。少し空気が重たくなったところで、きり丸が「それに…」と呟き、もう一度乱太郎達に振り返って、

「もしかしたら、金目になるものかもしれねーじゃん！！」

と目を小銭に変えて走って行った。
それに対して乱太郎としんべエは、

「…本っ当、きり丸らしいっていつかなんていつか…」
「ボクは食べ物だったらいいなー**」

半分乱太郎は呆れながら、しんべエは想像しながら、また2人もきり丸を追いかけるため走っていった。

どれだけ走っただろう。辺りを見回せば木、木、木……。辺り一面木ばかりだった。

乱太郎としんべエは、先に行ったきり丸を探していた。

「きり丸ー！！！」
「どこー！！！」

大きな声で呼んでみる。すると向こうの方から
「ここだー！！」と呼ぶ声が聞こえた。

2人は声のした方へ駆けてみる。

「オウ！乱太郎、しんべ工。遅かったな」

そこにいたのは石に腰掛けているきり丸の姿。

「きりちゃんが先に行き過ぎなんだよ」

「ゴメン、ゴメン」

悪びれた様子も無く言うきり丸に乱太郎は溜め息を吐いた。

「それにしても、ここ何処だろう？」

しんべ工が辺りを見回しながら言った。ここはもはや人間の通る道じゃなく、獣道らしき所だった。

「あれ？そういえば…」

きり丸を追いかけることに夢中だった乱太郎も来た道を覚えてない。となると、3人は…、

「…なあ、まさか俺たち…」

「ま、迷子おー！！？」

迷子である。

「疲れたよ……」

迷子になってから道らしき道を探し求め、3人は歩いていった。
が、一向に獣道からは出られず、仕舞いにはしんべエが歩くのに根を上げた。

「しんべエ……さつき休んだばかりじゃないか」
「だってえ……」

乱太郎の言うとおり、さつきからしんべエが疲れたの何だのと言うため、何度も休憩していた。
そのため、歩いた時間より、休んだ時間の方が長いような気がしてきた。

「しかしどうする……まだ日は暮れていないけど、もたもたしているとすぐ日が暮れるぜ？」

きり丸の言うとおり、まだ日は暮れていないが、もたもたしてるとすぐ日が暮れてしまう。

「一応外出届けは出してきたし、小松田さんの出門表にもサインしてきたから無断外出じゃ無いけど……」

「先生達……来てくれないかな……」
「そうだな……」

すっかり気力を失った3人。こんな事になるんだったら、先生達にあの穴のことを言っただけで来てもらうべきだった。

けれど、今更そんな事思ったって意味がない。
もはや3人の頭の中は絶望的だった。

「（わたし達…、このまま帰れないのかな……？）」

乱太郎の頭を最悪の考えがよぎったとき――

「あの…、すみません」

乱太郎達に向けて、ひとつの声が掛かった。

声からして、女の人だ。

声のした方を見ると、そこに居たのは、綺麗な黒髪をし、肩の出ている巫女服（？）らしきものを着た女の人と、銀色の綺麗な髪を左右で結って、黒い着物を着た女の子だった。

「何か…？」

服装からして、山に登る格好じゃない2人に対し、少し警戒しながらも怪しまれないように、返事をする。

「…………別に、警戒しなくても、襲ったりしないから」

「！！？」

ポツリと銀髪の子が言った。

何故、警戒していると分かったのかというように、乱太郎達は表情を変えた。

すると、その表情をみた銀髪の子が、

「あからさまに表情に出し過ぎ。……………あと、こんな山の中を、登山するような格好じゃない上に、身知らずの人間にいきなり声をかけられたら、誰だって警戒のひとつやふたつぐらいする……」

まるで、乱太郎達の心を覗いたかのような正確な言葉……………。さつきまで綺麗だと思っていた真紅の瞳からは、少しばかりの恐怖を覚えた。

緊迫した空気の中、黒髪の女の人が、

「あの、そんなに警戒しないで……私達、ちょっと聞きたいことがあるだけだから……」

と、言ってきた。

乱太郎達は「聞きたいこと？」と女の人に目を向けた。

「うん。……………長くなるかもしれないけど……」

「ダメだったら、無理しなくていいよ??」と苦笑いと言っているが、その顔は少し暗かった。

直感的に『この人達には何か事情がある』と感じた乱太郎は、女の人の頼みを聞くことにした。

「本当！！？ありがとう！！」

女の方は心底嬉しそうにお礼を言ってきた。

「えっと、それじゃあまず、自己紹介！！」

「私は園原 千代。千代でいいよ。そしてこっちの子が……」

「……琥珀」

どうやら黒髪の女の方が園原 千代という名前で、銀髪の少女が琥珀という名前らしい。

「わたしは猪名寺 乱太郎です！」

「僕は摂津のきり丸！！」

「ボクは福富しんべエです！」

「乱太郎君にきり丸君にしんべエ君か……。…うん！よろしくね！」

「……………」

最初の時より、警戒が解けた乱太郎達…。

そして、この出会いこそがこれから起こる非日常の始まりだった。

「（……は……『アカツキ』じゃない……）」

琥珀の周りの空気が一瞬変わった気がした……。

巫女と死神の段！

「えっと、それじゃあ乱太郎君、きり丸君、しんべん君」

「「何ですか？」」

「早速で悪いんだけど、いろいろ聞いてもいいかな？」

「「はい！！」」

…本当、いきなりですね。まあ、話が進むので別にいいんですが。

「それじゃあつと…、まず、ここはどこ？」

「裏裏山です！」

「…えっと、人外はいる？」

「人外って、なんスか??」

「…この世界の名前は…??」

「地球に名前なんてあるんですかあ??」

「…………マスター」

「——っ、うん…」

3つ程乱太郎達に質問すると、何やら琥珀と小さい声で話始めた。

乱太郎達はなにが何だか分からず、ただボーっとしていた。

少ししたら、話が終わったらしく、何やら真剣な顔で乱太郎達に向き合った。

そんな顔をされたら、コツチが緊張してしまう。

「…乱太郎君達…。ここから先は冗談に聞こえるかもしれないけど、今から言うことは全て、本当だから…」

「……だから、冗談抜きで聞いてほしい……」

一体、何を言われるのか……。

「私達は、此处とは違う世界から来ました」

「「「……へっ？」「」」

いきなり言われた事に、気の抜けた返事をしてしまった。

だって、普通はそうであろう。いきなり「私達は違う世界から来ました」なんて言われても、普通は信じられない。

それでも、千代の顔は真剣そのものだったので、何も言わずに黙って聞くことにした。

「初めは私達も信じられなかった。空間移動だなんて……。けれど
も、」

「乱太郎達にした質問で…、ハッキリした」

「「私達が空間移動したことが」」

その時の2人の目は嘘を言っている目じゃ無かった。だから乱太郎達も、

「ほ、本当なんですか……？」

「別の世界から来たって……」

「……うん」

乱太郎ときり丸の言葉に千代が頷いた。

「……空に穴が開いたのを、君達が知っているかどうかは知らないけど、私とマスターはその穴からコッチの世界に来たと思うの……」
「……あの穴の事!？」

そう。この裏裏山に来たのも、空に開いた正体不明の穴を追ってだ。まさか、その穴からこの2人の女の子が出てきたなんて……。ビックリしている乱太郎達に構わず、話を続ける。

「最初はさすがに信じられなかったよ?でも、乱太郎君達の質問に対する答えを聞いてると、確信したよ。此処は違う世界だって」

「……私達の世界に裏裏山なんて所はない。それに、人外を知らない人はいない。……私達の世界は地球なんて名前じゃない」

「私達の世界は……」

「『アカツキ』」

「アカ…ツキ…??」

乱太郎達は聞いたことの無い名前に首を傾げた。

「そう。アカツキ」

「どんな所なんですかあ？」

しんべエが興味津々に聞いてきた。

「どんな所かあ…。うーん…。簡単に言えば此処とは違う世界。難しく言えば別の次元にある世界…。って言えばいいのかな？」

「そうなんですかあ」

「あの、さつき人外がどうとかなんとか…。って、どういうことッスか？」

きり丸がさつきの質問で聞かれたことに対し、疑問をもっていた。

「ああ、その事。私達の世界には普通に、人以外の生物がいるんだよ」

「……例で妖怪」

「よ、妖怪いー!!??」

きり丸の顔が一気に青くなった。
それもそうだ。妖怪と聞くと、人を食べるという妖怪イメージがあ

るせいだ。それに気付いたのか、琥珀が、

「……確かに、中には人を食べる妖怪もいるけど、基本は皆おとなしいから……」

と説明。

……結局は居るらしいが。

「……えつとそれじゃあ、千代さんか琥珀ちゃんのどちらか……あるいはりよ、両方違うのか……」

「……乱太郎？」

乱太郎が何やらぶつぶつと言っている。
きり丸が少し引いた。

「乱太郎君が言いたいのは、多分、私か琥珀ちゃんのどちらかが妖怪なんかじゃないかって事だよね？」

「！はい」

「私達は妖怪じゃ無いよ。私はれっきとした人間……まあ、アカツキでは巫女をやっているけど……」

「巫女なんですか！？千代さん！？」

乱太郎が驚いたように言うと、千代が苦笑いしながら、「一応、巫女服……着てるんだけど……」と自分の服を見せた。
まあ、確かに巫女服に見える。

「何だか、色々話してたらややこしくなってきたね」

「という訳で、もう一度正式な自己紹介をしたいと思います!!」

どうやら、もう一度自己紹介するらしいです。

「えーっ、オホンッ。それでは改めてまして。園原 千代です。アカツキにある『園原神社』で巫女をしています。れっきとした人間ですからね!!」

自己紹介を終えると、3人から拍手があつた。

「ほら。次、琥珀ちゃんだよ?」

「……」

琥珀は少し複雑な顔をしながらも、自己紹介をした。

「……琥珀です。アカツキで……、…半人前の【死神】をしています」

3人から拍手があつた……がそれは直ぐにやみ、琥珀の言った単語に啞然とした。

「し、死神……?」

「……」

琥珀は小さく頷いた。

「「「魂取られるう——！！！！！！！！！！」」」

「取らないから安心してえー！！」

いきなり叫んだ3人に対して、千代が止めにはいる。

琥珀の方は溜め息を吐いている。

「だって、死神なんですよね！？」

「死神って、魂持っていくんスよね！？」

「ボクまだ死にたくないよぉー！！！！」

3人それぞれ違うことを言っているが、根本的なところは同じなようだ。それに対し、琥珀が

「……確かに死神は魂を刈る者。でも刈るのは、死期が近い者の魂だけ。死期が近く無い者の魂は刈れないの……」

と説明。

「わ、私達の魂は……？」

「……刈れない」

そう言われ、良かった　と肩の力を抜いた。
琥珀も琥珀で、やれやれといった顔をした。

「アーーーー！！！！？？忘れてた——！！！！！」

突然乱太郎が大声を出した。

「？？何を忘れてたの？？」

千代が頭に？を浮かべながら聞いてきた。

「わたし達、迷子だったんだ——！！！！！」

乱太郎のその言葉にきり丸としんべエも思い出したかのように、声を上げる。

「迷子？」

千代がそう聞くと、乱太郎達は力強く頷いた。

「…………マスター」

「…うん。そうだね」

千代が何かに頷くと、乱太郎達に、

「私達、来た道覚えてるから、一緒に戻らない？」

と聞いてきた。

天の助けとはまさにこのけとだ！！

「い、いいんですか!？」

「……困っている人を見捨てるほど、非情じゃない」

琥珀の言葉に千代も笑顔で頷いた。

こうして、千代と琥珀の助けあって無事、裏裏山から出ることが出来た3人。

後は忍術学園に帰るだけ。

そう思うと、体の力が抜けた気がした。

おまけ

帰り道の話。

「琥珀ちゃん。これからどうしよっか？」

「……………」

千代と琥珀がこれからのことについて話していると、乱太郎達が、

「千代さん、琥珀ちゃん。行く場所が無いなら、わたし達と共に来ませんか??」

「ていうか、来て下さい」

「来て下さい」

と2人の手を掴んで歩き始めた。

「へっ！？来て下さいって、何処に！？」

きり丸に手を引っ張られながら千代が聞くと、きり丸はにーっと笑いながら、

「もちろん、『忍術学園』にですよー」

と言った。

さてさて、これからどうなることやら…。

忍術学園に来た の段！

裏裏山に突如現れた謎の穴……………。

そのはなんと！！異世界に繋がっていたらしい！

その穴を通して『アカツキ』という世界から、こちらの世界にやってきた2人の少女……、園原千代と琥珀。

2人は乱太郎達に導かれるがままに、乱太郎達の通う学校……『忍術学園』にやってきた。

ここからが今回の話である。

「うわあゝ。大きいね」

乱太郎達に裏裏山から連れて来られた千代と琥珀は今、乱太郎達の通う学校……忍術学園の門の前にいる。

「…亭々宮程じゃないけど、確かにデカい」

千代の言葉に同意する琥珀。

確かに、学校にしては大きいと思う。

「忍術学園…ってことは、乱太郎君達は忍者か何かなの？」

「はい！！わたし達、忍者のたまごの忍たまです！」

千代の質問に元気よく答える乱太郎。

学園に戻って来られたからか、その声は裏裏山にいた時よりも元気があった。

「…それより、本当に良いの…？」

「何がツスか？」

「私達がここに入っても…」

琥珀の言葉に千代が はっ！とする。

「（そう言えばそうだ…。私達はこの世界の住人じゃ無い…。もしお世話になれるとしても、私達のこと…なんて話せばいいんだろう…。」

異世界から来ました。で信じて貰えるか否か…）」

千代がうーんと考えていると、学園の門が開いた。

顔を上げて門をみると、中から黒の忍装束を着た一人の男性が姿を表した。

その男性を見てきり丸が「げっ！」と口にした。

「きり丸？げっとはなんだ！げっとは…！」

「…土井先生…！」

きり丸の発した言葉に男の人が怒った。その男の人に乱太郎としんべエが同時に言葉を放った。

男の人は乱太郎達に顔を向けると、

「お前たち何処に行っていたんだ！小松田君にも行き先を言わないで！！外出届けを出したからといって、黙って出掛けるな！！心配したんだぞ！！」

と怒りはじめた。

乱太郎達は男の人の言葉に顔を少し俯かせて、「ごめんなさい……」と謝った。

男の人はその言葉に小さく溜め息を吐いて、「次からはちゃんと行き先を言うように。…心配懸けさせるな」と笑って乱太郎達の頭を撫でた。

その様子を啞然と見ていた千代達に男の人が視線を向けた。

「君達は……？」

突然声をかけられ、はっとした。

「あつ、いや、その。わ、私達は……」

千代が拳動不審になっていると、琥珀が助け舟？を出した。

「裏裏山で道に迷っている所を、その3人に助けてもらった者です」

…あえて逆の事を言う琥珀。その言葉に男の人は「本当か？」と乱

太郎達に聞くと、乱太郎達は頷いた。

すると、何を思ったのか、いきなり男の人が目に涙を浮かべ、乱太郎達に、

「人助けとは……！！やっぱりお前たちは忍者失格のよい子達だー！！」

と言いながら、先ほどもよりも激しく頭を撫ではじめた。

乱太郎達は少し複雑な気持ちで、撫でて貰っていた。

「…土井さん…でいいでしょうか？」

琥珀が男の人に向かって聞くと、男の人は乱太郎達の頭を撫でていた手を止め、琥珀達に身体を向けた。

「ああ。私は土井 半助。ここの教師をしている者だよ」

「ちなみに、わたし達1年は組の担任の先生でもあるんですよ！」

男の人は土井 半助と名乗った。ここ、忍術学園の教師らしい。

土井の自己紹介を聞いた途端、琥珀の目の色が変わった。

そして…

「土井さん。ここの責任者と会わせてください」
爆弾発言をした。

琥珀の言葉を聞いた途端、土井の目も変わった。

「……責任者？」
「はい。責任者……、簡単に言えばこの学園で最も偉い人……学園長に会わせてください」
「何故だい？何か学園長に用事でもあるのかい？」
「はい。用事なら有ります」
「……どんな用事が聞いてもいいかな？」
「それは、学園長にお会いしてから言います」
「……君達、何者だい？」
「今は言えません」

土井と琥珀の戦い？に千代はあわあわし、乱太郎達は啞然として
いる。

「……悪いけど、正体不明の子を簡単に入れるわけにはいかないか
らね」

「………そうですか」

「申し訳無いけど、お引き取り「待つてください！！土井先生！！」
…乱太郎？」

土井が琥珀達を帰そうとしたら、乱太郎が土井の言葉を割ってきた。

「土井先生！琥珀ちゃん達には深い事情があるんです！！」

「だから、学園長に会わせてあげて下さい！！」

「ぼくからも、お願いします！土井先生！！」

乱太郎、きり丸、しんべエが琥珀と土井の間に入って来て、土井に
向かってお願いしはじめた。

流石にこの行動には驚いたのか、土井も琥珀も千代も目を見開いて
いる。

「ちよつ、お前たち！！」

「…「先生！！！！お願いします！！」」

土井の制止の言葉も聞かず、お願いする3人。

「……………はあ。分かったよ」

その必死な姿に遂に心が折れた土井。

「じゃ、じゃあ！」

「この子達の用件を聞くよ。学園長に会わせてあげます」
「よ、良かった」

土井の言葉に千代が安堵の表情を浮かべた。
それは乱太郎達も同じ事。

「良かったですね！！千代さん！」

「ありがとう、乱太郎君」（涙）

「ただし！条件があります」

感動に浸っていると、土井がひとつの条件を…。

「…条件？」

「学園長とお会いになれる時、我々教職員もその場に同席します」
「ええっ！」

「これが無理ならお引き取りください」

その土井の言葉に、琥珀は、

「元々、先生方には同席してもらうつ予定だったので、その方が好都合です」

と初めから思っていたと言った。

「それなら、お会いする事を認めます」

「さあ。どうぞ」と土井に招かれ、初めて忍術学園へ……………。

「あつ！お客さんですね。それでは、入門表にサインおねがいします」

次回予告？らしきもの

「ようやく、忍術学園に入れた……………」
「何か長かったね。ここまでくるの」
「作者のせいだって。マスター」

すまん／by・作者

「ようやく次回、学園長と初対面だね」

「なんとか此処に置いてもらえるようにしなきゃ……」

「うん！！頑張ろう！！琥珀ちゃん！」

次回

赤月第5話『対面』

――赤月の名の下に我が力刮目せよ！――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4501s/>

おいでませ!!忍術学園!!

2011年10月7日02時27分発行